

Title	19世紀畿内先進農村における河川と地域経済：木津川流域を中心に
Sub Title	River transportation and regional economy in advanced Kinki area in 19th century, particularly around the Kizu river
Author	井奥, 成彦(Ioku, Shigehiko) 武田, 晴人(Takeda, Haruhito) 谷本, 雅之(Tanimoto, Masayuki) 吉田, ゆり子(Yoshida, Yuriko) 小川, 幸代(Ogawa, Sachiyo) 菅野, 則子(Sugano, Noriko) 石井, 寛治(Ishii, Kanji) 油井, 宏子(Aburai, Hiroko) 桜井, 由幾(Sakurai, Yuki) 島津, 良子(Shimazu, Yoshiko) 富善, 一敏(Tomizen, Kazutoshi)
Publisher	
Publication year	2011
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2010.)
JaLC DOI	
Abstract	19世紀の先進地域南山城においては、木津川水運を利用して肥料や農産物の流通が盛んであったが、その中で茶は、近世からの生産の発達の上で、開港というインパクトによって爆発的に生産・流通が盛行したこと、そこには近世以来の豪農の豊かな蓄積が金融面で生かされていたこと、そこに至るまでの過程で豪農は領主、大都市両替商、豪農相互などさまざまな関係性の中で蓄積を築く努力をしていったことなどが明らかになった。
Notes	研究種目：基盤研究(B) 研究期間：2008～2010 課題番号：20330074 研究分野：近世・近代日本経済史 科研費の分科・細目：経済学・経済史
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_20330074seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月 8 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20330074

研究課題名（和文） 19世紀畿内先進農村における河川と地域経済 - 木津川流域を中心に -

研究課題名（英文） River Transportation and Regional Economy in Advanced Kinki Area in 19th century, particularly around the Kizu River

研究代表者

井奥 成彦 (IOKU SHIGEHICO)

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：60184371

研究成果の概要（和文）：19世紀の先進地域南山城においては、木津川水運を利用して肥料や農産物の流通が盛んであったが、その中で茶は、近世からの生産の発達的基础の上に、開港というインパクトによって爆発的に生産・流通が盛行したこと、そこには近世以来の豪農の豊かな蓄積が金融面で生かされていたこと、そこに至るまでの過程で豪農は領主、大都市両替商、豪農相互などさまざまな関係性の中で蓄積を築く努力をしていったことなどが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In 19th century, the distribution of fertilizer and farm products was prosperous through Kizu River transportation in Minamiyamashiro area. Especially tea, which was produced increasingly from the early modern age, was become to be explosively produced and distributed since the opening of Japan. Tea manufacturers and tea merchants were financed by wealthy farmhouses, which were related each other, or related to financial merchants in Kyoto or Osaka.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2008 年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2009 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総 計	5,800,000	1,740,000	7,540,000

研究分野：近世・近代日本経済史

科研費の分科・細目：経済学・経済史

キーワード：畿内、木津川、経済社会、商品流通、豪農、金融

1. 研究開始当初の背景

近世と近代の連続と断絶に関する議論は古くて新しい議論だが、実際の研究においては両時代が別々に研究されることが多かった。近年ようやく、近世・近代を通して日本の歴史を見ようとする研究が各分野で増えてきており、19世紀は両時代をまたぐ世紀として注目されている。本研究は、かつて速水融が言ったような意味での「経済社会」が近世において展開した後、近代にどのように引き継がれ発展していくのか、また古代・中世

史に比して近世・近代史ではあまり注目されてこなかった木津川が、「経済社会」の発展に少なからぬ役割を果たしたのではないかといいた発想から、当該地域を見ようとしたものである。

2. 研究の目的

本研究は、かつて我々研究グループ（南山城研究会）が科学研究費を受けて結実させた成果（石井寛治・林玲子編『近世・近代の南山城』東京大学出版会、1998年）をさらに

発展させ、19世紀の先進地域である南山城地域における経済発展の様相を広域的、多角的に捉えようとしたものである。本研究では、日本の先進地域畿内、具体的には南山城地域において、近世における経済社会の展開の具体相を明らかにし、さらにそれを承けて近代において経済社会がどのように発展していったのかを明らかにしようとした。経済社会の発展を考える場合、財、貨幣、情報、そして人の流れをつかむことが重要であるとの認識から、それらの流れにおいて重要な役割を果たしたと思われる木津川水運を意識しつつ、その周辺での人々の経済活動を追うことを目的とした。

3. 研究の方法

まず、当該地域中心部を流れる木津川が商品流通の鍵を握ったとの観点から、南山城の木津川流域の自治体（木津川市、精華町）に史料を求めた。

次に、当該地域の商品生産と流通について、特に幕末以降急成長する茶業に注目して、その関係の史料を採訪し、分析した。その際、金融に果たした豪農の役割に注目し、さらに金融をめぐる豪農相互間や大都市金融業者と当該地域豪農の関係、豪農と領主の関係などにも目を配った。

さらに、経済社会が発展する中で農村社会はどのような状況であったかを知る史料を採訪、分析した。

史料の採訪に際しては、できるだけ自治体史編纂の際の資料収集の成果（史料写真など）を活用してもらい、資料の収集方法は主にデジタルカメラによる撮影によった。

4. 研究成果

(1) 木津川水運

木津川水運については、主に小川幸代（研究分担者）が史料採訪と研究を行った。小川が収集した史料のうち、木津川市旧加茂町の森岡宣也家文書は、船株仲間の史料を中心として、舟運や舟運に関わる馬方の史料まである大量の史料群である。加茂浜は藤堂藩の御用も務めた浜であるし、明治以降の史料もあるので、藤堂藩の時代とそれ以降の時代とを比較することも視野に入れて、研究を進めている。同じ旧加茂町の元大庄屋梶田家文書の中の、大庄屋としての日記の中にも舟運関連の記述がある。

木津川市旧木津町の八木芳郎家は木津川舟運の取締役を務めた家であり、木津川の畔に今も大きな倉庫が残っている。江戸時代には堺屋の屋号で商売もしていた。同家の舟運関係史料は、立命館大学に「木津村文書」として所蔵されており、重点的に収集した。同家はまた、後述するように我々研究グループが従来から研究対象としてきた西法花野村

の豪農浅田家に一時期資金を融通するなど関係が深く、19世紀に入ってから浅田家の復興に大いに寄与した。

木津川市旧木津町土師浜の武田喜代治家文書には、江戸時代の舟運関係の文書のほか、明治の内国通運会社の史料もある。土師浜は木津浜の補助的な地位にありながら、流通では重要な位置を占めている。明治への移行期に注目しつつ研究を進めている。

以上、調査した木津川水運関係の主な史料群を挙げたが、相当量の史料が収集できたので、木津川水運の実態をかなりの程度明らかにすることができると思われる。ただ、中核の一つになりうる「木津村文書」の収集が研究期間の最後の方であったため、その分析は今後待つところが大い。

(2) 商品流通の展開と豪農の動向

次に、当該地域の商品生産と流通を考える場合、鍵になるのが幕末開港以来急速に生産を伸ばした茶である。そしてそこには当該地域の豪農が関わっていた。

【茶商の経営】茶商の個別具体的な経営事例として、島津良子（研究協力者）は綴喜郡宇治田原町郷之口の茶卸商田丸屋（潮見家）を対象として研究を進めている。島津によると、開港以前からの周辺地域での煎茶生産の基礎の上に、田丸屋は幕末には山城のみならず隣国の大和、近江など広範囲から茶を仕入れていた。販売先は江戸が大部分で、慶応元年から2年（1865～66）にかけて、横浜の外国商人への売込業者である長井利兵衛・山本嘉兵衛ら江戸の4商人から7000両余もの内金を受け取っていた。慶応3年12月の神戸開港以後も、しばらくは横浜の茶屋（中条）順之助が主要販売先になっていることに象徴されるように、横浜からの外国輸出をめざした販売が主であった。明治初年から6年頃は田丸屋及び宇治田原地域での茶の流通の最盛期で、明治2（1869）年には伏見へ茶積出のために村営の船便を運行したという史料も残されている。明治6年から9年にかけての田丸屋の総販売額は、年間3万円以上にまでなっている。ところが、日本の輸出茶が量的に最盛期を迎える明治13年には、田丸屋は原価割れを来しており、営業の転換点に立っていた。この頃の主要販売先は神戸で、取引相手としては中条瀬兵衛が最大（年間3万円）であった。この後、田丸屋はしだいに国内販売にシフトすることで生き残りを図っていったごとくであるが、そのあたりについては今後の分析に待ちたい。

【豪農をめぐる金融関係】石井寛治（連携研究者）は、19世紀末の浅田家（北・南両家）が南山城の茶商の旺盛な資金需要に対し融資を行っていた事実に着目し、19世紀初頭に資金不足で木津の堺屋庄兵衛（前出の八木

家)から多額の負債を負っていた状況からどのように困難を回復して資本蓄積を行っていったかに注目して分析を進めている。また両浅田家の困窮には領主である藤堂藩から農村再建の資金として要求された多額の御用金が大きき原因となっていたことも明らかにした。そもそも両浅田家は堺屋と、木津川水運を通じて大坂や伏見の油粕を信用買いすることができたことから繋がりを深めた。石井は見えており、その堺屋は、三井京都両替店の「御為替銀郷貸」の対象に選ばれてもいる。しかし浅田北家は、文化10(1813)年に所持田畑の一部を堺屋に売却して相当額(銀20貫)の資金を調達したことを境に大坂と油粕の直接取引を行うようになった。同家が信用買いによる仕入れ価格の高騰を回避する選択をし、堺屋への資金依存から脱却したものと思われる。その後両浅田家は油粕取引を拡大して資本蓄積を行い、幕末開港以降は製茶金融の需要に対応して、金融面から自らの経済活動を活性化していったものと思われる。

このように、19世紀の当該地域では、金融面で豪農と領主、豪農相互、豪農と大都市両替商、豪農と肥料商、豪農と茶商といった、豪農を巡る諸関係の中で経済活動が展開していたことが明らかになり、その上で当該地域において経済社会が発展していったことが想定されよう。こういった諸関係は、19世紀の当該地域では広く見られたと思われるが、その中での豪農経営のありかたには諸類型あったと思われる。

【試行錯誤する豪農】井奥成彦(研究代表者)は、その意味で、違ったタイプの豪農のあり方の事例として、幕末から昭和戦前期まで生きた相楽郡精華町旧菅井村の中小豪農松田弥三郎(松翠)を取り上げ、その経営と地域への関わり方を明らかにしつつある。松田弥三郎は、幕末開港以降この地域に、古い迷信に基づく抵抗を受けながらも養蚕業を導入、茶業を振興するとともに、旧来からのこの地域の主産業であった綿業にも、国産綿が外国綿と品種・性質・用途が異なることからなお発展の余地があるとして、期待を持ち続けた。彼はまた、木津川の洪水で荒廃した農村の復興に報徳仕法を導入し、一方で関西鉄道敷設などの新しい動きに対しては、それを契機に外部の者による村の土地所有、大阪など大都市の商人が村に進出してきて村の諸利益を持ち去ることを懸念するなど、旧時代以来の農村共同体維持を志向していた。新しいものを導入しつつも古いものを維持しようとする、時代の画期に当たっての豪農の試行錯誤が見られて、興味深い。なお松田弥三郎は、この間自己及び地域に関する詳細な記録を数多く残しており、それらは当該地域の研究にとって極めて重要なものとなっている。

【経済社会の発展と地域社会の変動】経済社会の発展は、時として地域社会の変動を伴うとの観点から、富善一敏(研究協力者)は、嘉永4(1851)年に相楽郡祝園村(現精華町)で起こったある直訴事件を検討している。この一件は、領主である旗本天野氏の上方知行所村々が起こしたものである。嘉永3年2月、代官見習役森嶋徳三郎は、領主の機嫌伺いに独断で江戸に出府し、留守中の役務は割元の大住村岡本五郎右衛門に任せて3か月もの間滞在したが、その費用は知行所村々に賦課し、問題となった。嘉永4年正月、祝園村の庄屋・年寄や五郎右衛門の子である大住村庄屋見習條太郎ら7名が、森嶋徳三郎の手先となり「不筋の取り扱い」をするとして大住村庄屋・菱田村庄屋を、また徳三郎の後見を退いたにもかかわらず後見同様の振る舞いをするとして徳三郎の父森嶋清右衛門を批判し、領主の裁許を求めた。吟味は二転三転したが、結局徳三郎が詫言状を入れ、清右衛門との別居を確約、五郎右衛門も当一件についての訴願はせず、また知行所村々の治安維持を確約させられて落ち着いた。なお徳三郎・五郎右衛門両人は、冥加金50両ずつを領主にし出すことになり、年内に全額上納した。この事件に関わった五郎右衛門は上方知行所の年貢・諸勘定実務を掌握し、問屋役を務めることで富裕化した。近世後期に成長した農民が、若年の代官見習徳三郎に対する知行所村々の不満を利用し、上方代官を4代務めた森嶋家に代わり、地域社会でのヘゲモニーを握ろうとした事件であると、富善は位置づけている。

【郷土(帯刀人)の位置と歴史的意義】ところで、豪農の中には武士と農民の境界に位置する者がいた。吉田ゆり子(研究分担者)はそれについての史料の発掘と考察を行った。

まず、相楽郡林村(現木津川市)の庄屋を務めた小林凱之家は、中世では国人領主狛氏に従う武士であった。同家は地域では、近世においても「狛連中」「狛一族」として、百姓とは異なる位置づけがされていた。一方、享保8(1723)年の京都町奉行所の調査では、同家は日常的には「百姓」で、「御地頭様御用之節」や神事祭礼等の際だけ帯刀を許される者とされた。しかし同家は、自分の家を旧来から武家の家で、「郷土」とであると認識しており、その地位の認定を求め続けた。同家については、帯刀願、由緒書、及びこれまで閲覧が許されなかった系図や過去帳、系譜類も閲覧したが、系図は18世紀後期に作成された系図に加筆されていたものと思われる。その中で、明治維新に至る代々の当主の系譜に「郷土相続」と記されていることが注目される。この系図は偽文書である可能性が高いが、だからといって捨て去るのではなく、内容や作成の背景を探ることにより、

その家がおかれた社会的地位や家の意識を見ようと考えている。今後は狛郷の人々に同家がどのように認識されていたのか、「無足人」という在郷の武士と小林家とは違うと認識されていたのかなど、地域の人々の視点から検討していきたい。

次に、相楽郡野日代村（現木津川市）野村美佐子家は狛連中の家で、藤堂藩の「無足人」であるが、天明2(1782)年から家が中絶し、文政7(1824)年に同姓の野村忠敏が再興した。同家には、忠敏が写した「野村累代暦」や考安天皇から忠敏の代までの「野村家景譜」が残されている。いずれも本家再興に際して忠敏が旧書を写し、家の歴史を再編成しようとしたものとみられるが、これらが偽文書である可能性も否定できない。今後検討を要する。

また、相楽郡笠置村（現笠置町）森嶋家は大庄屋で、藤堂藩の「無足人」の家である。安永7(1778)年から文化13(1816)年まで身上不如意にて「無足人」の相続をしなかったため中絶し、文化14年に一族の者が本家を相続し、改めて「無足人」に取り立てられた。同家に関してはまだ分析途上であり、今後、他の「無足人」の由緒などと併せて考察していきたい。

(3)農村の動向

一方、上記のような商品生産と流通の基底部分をなす当該地域農村ではどのような状況が展開していたのであろうか。

【余剰発生の可能性】谷本雅之（研究分担者）は、農村経済に変容をもたらす基本的な条件は農家経営における余剰の発生であるとの観点から、17世紀以降幕末までの長期的な年貢納入の実績を通して、余剰の発生とそれが（年貢のかたちで徴収されず）農民の手元に蓄積されていた可能性を探っている。対象としたのは、精華町旧下狛僧坊村のうちの瑞龍寺領である。まず事実として、同領の高は258.04石で変わらない。納入石数の趨勢としては、17世紀の年貢率の高さ、18世紀の下落傾向、19世紀前半の年貢率の安定化（下げ止まり）が指摘できる。年貢納入高の減少傾向が農業生産の衰退を意味していたとすれば、それは農村経済の疲弊を示す指標となるが、そうでないとすれば、農家経営における余剰発生の一つの条件を満たすことになる。ここでは少なくとも、この条件の存在の可能性は指摘できる。年貢高の決定方式の変化も、注目される。遅くとも宝暦3(1753)年以降、5年単位の定免制が採用され、幕末まで続き、賦課率も村高の52%で一定している。また減免の方法が、定免率を破棄する「破免」方式ではなく、被害による減少の石高を村高から差し引いて、それに0.52をかけ、年貢納入高を計算していることも特徴である。年貢率一定という意味では定免を維持しつつ、実質的

には作柄に応じた年貢賦課率の変更を許していたのである。年貢納入高の計算方法も、興味深い。ここでは、村高から「起こし返り免下げ」と「永荒」を引いた「本毛付」に対しては、60%以上となる率で賦課し、しかし村高に対しては52%となる計算をしている。一方、各年の「御勘定目録」では、村高から損害を受けた石数を引き、その石高に対して0.52を掛けて、その年の年貢高としていた。こういった年貢計算方法と余剰発生との関係を探ることが今後の課題である。

【農民家族の存在状況】桜井由幾（研究協力者）は、かつて浅田家文書を中心として相楽郡西法花野村で行った農民家族の存在状況に関する研究を、今回は木津川市旧加茂町の里村と北村を対象として行っている。旧加茂町史編纂のために収集された膨大な文書群のうち、里村に関しては春日若宮文書、北村については北村区有文書を使用しているが、いずれも量が膨大なので、収集と分析にはなお時間が必要である。里村については、まず「宗旨改帳」で家族構成と人口、家数などの変遷を分析している。これまでに文化から明治初年にかけての十数冊を把握したが、なお探索中である。西法花野村では18世紀後半、直系の親と子どもたちという近世農民家族の基本型が失われるが、その傾向は19世紀前半のどこかで反転し、天保期には再び子の数が増え、人口も家数も増加する。この現象が南山城一帯に共通のものなのか、西法花野村だけのものなのかを検証する予定である。里村に関しては、西法花野村で不明であった文化文政期の動向を上記史料で詳細に知ることができ階層構成が判明する「免割帳」、綿作状況を知ることができる「田畑綿免配り帳」がある。文政から天保10年代にかけて毎年の「助免願」も存在し、家財を売却した者を掲載した「怙脚[ママ]人算用帳」もある。難渋者の書上もあり、里村のおかれていた状況はさまざまな角度から把握できそうである。また、労働力流出を示唆する他国稼・奉公人調べも文化10(1813)年から文政10(1827)年まで連続して残っており、西法花野村で明らかにしえなかった人口減少の背景を具体的に見ることができそうである。後継男子を得る手段といわれる養子が西法花野村でも非常に多かったが、里村でも同様である。里村の隣村である北村に関しては、まだ史料収集が十分でないが、宗旨改帳も豊富であり、免割帳による階層分析も可能なので、今後の調査に待ちたい。

【茶製出稼ぎ】菅野則子（研究協力者）は、北村における茶製出稼ぎ労働者の実態を追った。素材は、明治9(1876)年から10年にかけての人の移動を記した「戸籍送請帳」で、117件の事例が収められている。移動の理由としては養子縁組、引越し、心願回国、

寄留、養生、出稼ぎなどが記されているが、その中、出稼ぎは 59 件、中でも茶製出稼ぎは 53 件に及ぶ。一家で複数の労働力を出している場合もあり、実際の人数は男 47 人、女 15 人の計 62 人を数える。これらの事例は、5 月 11 日から 7 月 11 日までの 2 か月間に限られる。出稼ぎ日数は、長い方で 50 日、短い方で 10 日である。50 日間も出稼ぎに出た者は商家など農業以外を生業とする者の子弟が多く、比較的村を留守にすることのできる者たちであった。概して女性の方が出稼ぎ期間が短い。また、出稼ぎ者の年齢は 10 歳代から 50 歳代までであったが、その中で 20 歳代が最も多い。女性についてみると、婚姻前の若い層が、子育てを終わった年配の層かの両極に分かれるのが特徴である。作業内容についてはこの史料からはわからないが、前述のような当該地域の茶業盛行の基底に、このような労働事情があった。

【農村における情報伝達】油井宏子（研究協力者）は、畿内先進地域である南山城農村において、諸情報が誰の手により、どこからどのように伝わったかを解明している。藤堂藩支配の西法花野村庄屋浅田家（北家）には、宝永 8（1711）年から寛政 5（1793）年の間の 14 冊の「飛脚帳」が残されている。これらと天明 2（1782）年に浅田幸蔵から大庄屋梶田小重郎に宛てた飛脚退役願から、浅田家では初期には庄屋とは違う人物が、のちには庄屋が兼帯して飛脚役を務めていたことがわかった。ただ、庄屋役と飛脚役は連動したものではなく、浅田家が家として飛脚役を引き受けていたと考えられる。そして、この飛脚は藩の公用の情報伝達を担っていたと考えられる。飛脚問屋がいなかった上狛では、浅田家が公用の村次である飛脚役を受け、藤堂藩の命令や情報などを伝達していたのである。また、少なくとも天明期には飛脚の村次のルートが確立していたと思われる。正徳から天明の間に、十数か所に及んでいた行き先が 3 か所にしぼられているからである。また、飛脚の運搬品目にも変化が見られる。宝永・正徳期には、茶壺・問屋手形など種々のもの、及び加茂組内の触状・廻状などを運び、また村の諸行事に関わったりもしたが、天明期になると、飛脚は村次の飛脚に専業化している。飛脚の範囲外となった仕事については、他の人足やありきなどが担ったと考えられる。なお飛脚賃金ほか飛脚に関わる諸費用は、西法花野・野日代・新在家・東法花野 4 か村で高割された。以上のことが普遍的なことだったのか、寛政以降の飛脚の実態はどのようなであったかなどは、今後の課題となる。

以上、19 世紀の先進地域南山城においては、木津川水運を利用して肥料や農産物の流通が盛んであったが、その中で茶は、近世期か

らの生産の発展の基礎の上に、幕末開港というインパクトによって爆発的に生産・流通が盛行したこと、そこには近世以来の豪農の豊かな蓄積が金融面で生かされていたこと、そこに至るまでの過程で、豪農は領主、大都市両替商、豪農相互などさまざまな関係性の中で蓄積を築く努力をしていったことが見えてきた。しかし豪農の中には、旧来の共同体を維持しつつ地域の発展を目ざそうとする者もあり、豪農のあり方は多様であったこともまた見えてきた。一方、当該地域の年貢納入のメカニズムの面からも、蓄積の可能性が見えることが指摘され、茶業の盛行に伴う村を越えた労働力移動の実態も明らかにされた。また、これら諸々の社会の変化は、情報伝達のあり方にも影響することも示唆された。こうした中での木津川水運の具体相や農村での家族の存在形態などの分析については、史料が膨大なため今後に待つところが大きい。興味深い成果が期待される。今後は各自の取り組んでいる研究の精度を上げるとともに、全体として、豪農をめぐる関係性、その中での豪農経営の諸類型といったところに重点を置きつつ当グループの研究を発展させていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

石井寛治、日本近代史上の上方経済、地域と経済、査読なし、12 号、2009 年、1-18 頁

〔学会発表〕（計 1 件）

谷本雅之、近代日本の経済発展と家族・世帯経済、比較家族史学会第 50 回全国大会、2008 年 6 月 22 日、東北大学

〔図書〕（計 3 件）

武田晴人、東京大学出版会、日本経済史 6、2010 年、203-226 頁

井奥成彦、慶應義塾大学出版会、日本経済史 1600-2000、2009 年、49-93 頁

吉田ゆり子、山川出版社、兵と農の分離、2008 年、全 104 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

井奥 成彦 (IOKU SHIGEHICO)

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：60184371

(2)研究分担者

武田 晴人 (TAKEDA HARUHITO)

東京大学・大学院経済学研究科・教授

研究者番号：20126113

谷本 雅之 (TANIMOTO MASAYUKI)

東京大学・大学院経済学研究科・教授

研究者番号：10197535

吉田 ゆり子 (YOSHIDA YURIKO)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：50196888

小川 幸代 (OGAWA SACHIYO)

長岡大学・経済経営学部・教授

研究者番号：90320879

菅野 則子 (SUGANO NORIKO)

帝京大学・文学部・教授

研究者番号：10017535

(H21→H22：研究協力者)

(3)連携研究者

石井 寛治 (ISHII KANJI)

東京大学・名誉教授

研究者番号：20012122

(4)研究協力者

油井 宏子

桜井 由幾

島津 良子

富善 一敏